

民間大使ガーナへ行く・読後感

中村 嘉孝

日本人必読の書なり

外務省の出先機関としての大使館代表としては型破りの民間大使のエッセイです。

「日本生まれのガーナ人」といわれるほどガーナを愛し、ガーナの過去・現在・未来を語り、さらに大使として、日本外交のあり方に厳しい批判の言葉を歯に衣着せず述べられるなど、大変内容豊かな本です。

アフリカが日本から遠いせいか、商社マンとしてアフリカへ出張したこともある私ですが、「アフリカのことは欧米に任せておけばいいや」くらいに考えておりましたが、この本で認識を改めました。

アフリカの人々を奴隷として北米に送り出した宗主国は大変な罪を犯しました。最近アフリカの国々から謝罪を求められたと記憶しておりますが、逃げ腰ですね。人類が犯した過去の数々の罪は、西欧の植民地政策によって、世界的な規模となったわけですから、植民地問題や奴隷制度のところから出発すべきかもしれません。

日本が行なった朝鮮政策・日中戦争についての著者のコメントに同意します。

ODAのあり方、ODAに群がる国際的業者たちへの痛烈な批判もすごい。

外務省の非効率な事務処理（30ドルのガーナ国内出張が本庁申請で送金されてくるとは、まさにオドロキ）、本末転倒の国際会議（例：TICAD）など、あきれられる話がいろいろ出て来ます。

外務省をはじめ省庁のコスト意識の欠如は、カネをいかに使うかのみに集中するという立場を改善しない以上困難ですね。

現役の大使として、アメリカのイラク攻撃に対する日本政府の対応への意見具申書を外務大臣宛に出されたのには脱帽です。

スマイル会でも、この本をベースに討論することはいかがでしょう。

ともかく、出来るだけ多くの日本人が読むべき本です。

2006年12月23日